



# 構成情報をバックアップします

## SnapCenter software

NetApp  
January 09, 2026

# 目次

構成情報をバックアップします	1
バックアップでサポートされるOracleデータベース構成	1
Oracleデータベースでサポートされるバックアップのタイプ	1
オンラインバックアップ	2
オフラインバックアップ	2
SnapCenterによるOracleデータベースの検出方法	2
Oracle バージョン 11___ ~ 12_c_R1	2
Oracleバージョン12cR2から18c、19c、21c	3
RACセットアップノユウセンノオト	4
Flex ASMセットアップ	4
必要なデータベースの状態	4
Oracle Recovery Managerを使用してバックアップをカタログ化する方法	5
外部カタログデータベース	5
RMANコマンド	5
命名形式	5
クロスチェック処理	6
カタログ情報を削除します	6
バックアップ固有のプリスクリプトとポストスクリプト用に事前定義された環境変数	6
バックアップポリシーの作成でサポートされる事前定義された環境変数	7
サポートされるデリミタ	11
バックアップ保持オプション	12
バックアップスケジュール	12
バックアップの命名規則	13

# 構成情報をバックアップします

## バックアップでサポートされるOracleデータベース構成

SnapCenter では、各種の Oracle データベース構成のバックアップがサポートされません。

- Oracleスタンドアロン
- Oracle Real Application Clusters (RAC)
- Oracleスタンドアロンレガシー
- Oracleスタンドアロンコンテナデータベース (CDB)
- Oracle Data Guardスタンバイ

オフラインマウントバックアップは、Data Guardスタンバイデータベースのみ作成できます。オフラインシャットダウンバックアップ、アーカイブログのみのバックアップ、およびフルバックアップはサポートされていません。

- Oracle Active Data Guardスタンバイ

オンラインバックアップは、Active Data Guardスタンバイデータベースのみ作成できます。アーカイブログのみのバックアップとフルバックアップはサポートされません。

Data GuardスタンバイデータベースまたはActive Data Guardスタンバイデータベースのバックアップを作成する前に、Managed Recovery Process (MRP；管理リカバリプロセス) が停止し、バックアップが作成されるとMRPが開始されます。

- Automatic Storage Management (ASM；自動ストレージ管理)
  - 仮想マシンディスク (VMDK) 上の ASM スタンドアロンおよび ASM RAC

Oracleデータベースでサポートされているすべてのリストア方式の中で、VMDK上で実行できるのはASM RACデータベースの接続およびコピーリストアだけです。

- ASMスタンドアロンおよびASM RAC on Raw Device Mapping (RDM) + ASMLibの有無にかかわらず、ASM上のOracleデータベースに対してバックアップ、リストア、およびクローニングの操作を実行できます。
- Oracle ASMフィルタドライバ (ASMPFD)

PDB移行およびPDBクローニング処理はサポートされていません。

- Oracle Flex ASM

サポートされているOracleバージョンの最新情報については、["NetApp Interoperability Matrix Tool"](#)。

## Oracleデータベースでサポートされるバックアップのタイプ

Backup typeには、作成するバックアップのタイプを指定します。SnapCenter では、Oracle データベースに対してオンラインバックアップタイプとオフラインバックアップ

タイプがサポートされます。

## オンラインバックアップ

データベースがオンライン状態のときに作成されるバックアップを、オンラインバックアップと呼びます。ホットバックアップとも呼ばれるオンラインバックアップでは、データベースをシャットダウンすることなくバックアップを作成できます。

オンラインバックアップの一環として、次のファイルのバックアップを作成できます。

- データ・ファイルと制御ファイルのみ
- アーカイブログファイルのみ（このシナリオではデータベースはバックアップモードになりません）
- データ・ファイル、制御ファイル、およびアーカイブ・ログ・ファイルを含むフル・データベース

## オフラインバックアップ

データベースがマウント済み状態またはシャットダウン状態のときに作成されるバックアップを、オフラインバックアップと呼びます。オフラインバックアップはコールドバックアップとも呼ばれます。オフラインバックアップに含めることができるのは、データファイルと制御ファイルだけです。オフラインマウントバックアップまたはオフラインシャットダウンバックアップを作成できます。

- オフラインマウントバックアップを作成する場合は、データベースがマウント済み状態であることを確認する必要があります。

データベースがその他の状態の場合、バックアップ処理は失敗します。

- オフラインシャットダウンバックアップを作成する場合、データベースはどの状態でもかまいません。

データベースは、バックアップを作成するために必要な状態に変更されます。バックアップが作成されると、データベースは元の状態に戻ります。

## SnapCenterによるOracleデータベースの検出方法

リソースとは、SnapCenter で管理されるホスト上のOracleデータベースです。使用可能なデータベースを検出したあとに、これらのデータベースをリソースグループに追加してデータ保護処理を実行できます。

次のセクションでは、SnapCenter がさまざまなタイプおよびバージョンのOracleデータベースを検出するために使用するプロセスについて説明します。

### Oracle バージョン 11\_\_\_ ~ 12\_c\_R1

#### RACデータベース

RACデータベースは、`/etc/oratab` エントリに基づいてのみ検出されます。`/etc/oratab` ファイルにデータベースエントリが格納されている必要があります。

#### スタンドアロン

スタンドアロンデータベースは、`/etc/oratab` エントリに基づいてのみ検出されます。

## ASM

ASMインスタンスエントリが/etc/oratabファイルにある必要があります。

### RAC 1ノード

RAC One Nodeデータベースは、/etc/oratabエントリに基づいてのみ検出されます。データベースが nomount、mount、またはopenのいずれかの状態である必要があります。/etc/oratabファイルにデータベースエントリが格納されている必要があります。

データベースがすでに検出され、バックアップがデータベースに関連付けられている場合、RAC One Nodeデータベースのステータスは名前変更または削除とマークされます。

データベースを再配置する場合は、次の手順を実行する必要があります。

1. フェイルオーバーされたRACノードの/etc/oratabファイルに、再配置されたデータベースエントリを手動で追加します。
2. リソースを手動で更新します。
3. リソースページからRAC One Nodeデータベースを選択し、[データベース設定]をクリックします。
4. データベースを設定して、データベースを現在ホストしているRACノードに優先クラスタノードを設定します。
5. SnapCenter処理を実行します。
6. あるノードから別のノードにデータベースを再配置し、以前のノードのoratabエントリが削除されていない場合は、同じデータベースが2回表示されないように、oratabエントリを手動で削除します。

## Oracleバージョン12cR2から18c、19c、21c

### RACデータベース

RACデータベースはsrvctl configコマンドを使用して検出されます。/etc/oratabファイルにデータベースエントリが格納されている必要があります。

### スタンドアロン

スタンドアロンデータベースは、/etc/oratabファイルのエントリとsrvctl configコマンドの出力に基づいて検出されます。

## ASM

ASMインスタンスエントリが/etc/oratabファイルに含まれている必要はありません。

### RAC 1ノード

RAC One Nodeデータベースは、srvctl configコマンドのみを使用して検出されます。データベースが nomount、mount、またはopenのいずれかの状態である必要があります。データベースがすでに検出され、バックアップがデータベースに関連付けられている場合、RAC One Nodeデータベースのステータスは名前変更または削除とマークされます。

データベースが再配置された場合は、次の手順を実行する必要があります。リソースを手動で更新します。です。リソースページからRAC One Nodeデータベースを選択し、[データベース設定]をクリックします。です。データベースを設定して、データベースを現在ホストしているRACノードに優先クラスタノードを設定します。です。SnapCenter処理を実行します。



/etc/oratab ファイル内に Oracle 12\_c\_R2 および 18\_c\_database のエントリがあり、同じデータベースが srvctl config コマンドで登録されている場合、SnapCenter は重複するデータベースエントリを削除します。古いデータベースエントリがある場合、データベースは検出されますが、データベースは到達不能になり、ステータスはオフラインになります。

## RACセットアップノユウセンノオト

Oracle Real Application Clusters (RAC) セットアップでは、SnapCenter がバックアップ処理の実行に使用する優先ノードを指定できます。優先ノードを指定しない場合は、SnapCenter によって自動的に優先ノードが割り当てられ、そのノードにバックアップが作成されます。

優先ノードには、RACデータベースインスタンスが存在するクラスタノードの1つまたはすべてを指定できます。バックアップ処理は、これらの優先ノードで優先順にトリガーされます。

例

RACデータベースcdbracには3つのインスタンスがあります。cdbrac1はnode1に、cdbrac2はnode2に、cdbrac3はnode3にあります。

node1とnode2のインスタンスが優先ノードとして設定され、node2が第1優先ノード、node1が第2優先ノードとして設定されます。バックアップ処理を実行すると、最初の優先ノードであるnode2で最初に処理が試行されます。

node2がバックアップ対象の状態でない場合（ホストでプラグインエージェントが実行されていないなどの複数の原因が考えられます）、ホスト上のデータベースインスタンスが指定したバックアップタイプに必要な状態ではありません。または、FlexASM構成のnode2上のデータベースインスタンスがローカルASMインスタンスによって処理されていない場合、node1で処理が試行されます。

node3は優先ノードのリストにないため、バックアップには使用されません。

## Flex ASMセットアップ

Flex ASMセットアップでは、カーディナリティがRACクラスタ内のノード数より少ない場合、リーフノードは優先ノードとしてリストされません。Flex ASMクラスタノードのロールに変更があった場合は、優先ノードが更新されるように手動でを検出する必要があります。

## 必要なデータベースの状態

バックアップを正常に完了するには、優先ノード上のRACデータベースインスタンスが必要な状態である必要があります。

- オンラインバックアップを作成するには、設定された優先ノードのRACデータベースインスタンスの1つがOPEN状態である必要があります。
- オフラインマウントバックアップを作成するには、設定された優先ノード内のRACデータベースインスタンスの1つがマウント状態であり、他のすべてのインスタンス（他の優先ノードを含む）がマウント状態以下である必要があります。
- RACデータベースインスタンスはどの状態でもかまいませんが、オフラインシャットダウンバックアップを作成するには優先ノードを指定する必要があります。

# Oracle Recovery Managerを使用してバックアップをカタログ化する方法

Oracle Recovery Manager (RMAN) を使用してOracleデータベースのバックアップをカタログ化し、Oracle RMANリポジトリにバックアップ情報を格納できます。

カタログ化されたバックアップは、あとでブロックレベルのリストア処理や表領域のポイントインタイムリカバリ処理に使用できます。カタログ化されたバックアップが不要となった場合は、カタログ情報を削除できます。

カタログ化するためには、データベースの状態が少なくともマウント済み状態であることが必要です。カタログ化を実行できるのは、データバックアップ、アーカイブログバックアップ、およびフルバックアップです。複数のデータベースを含むリソースグループのバックアップに対してカタログ化が有効になっている場合は、データベースごとにカタログ化が実行されます。Oracle RACデータベースの場合、データベースが少なくともマウント済み状態である優先ノードでカタログ化が実行されます。

RACデータベースのバックアップをカタログ化する場合は、そのデータベースに対して他のジョブが実行されていないことを確認します。別のジョブが実行されている場合は、カタログ化処理がキューに登録されずに失敗します。

## 外部カタログデータベース

デフォルトでは、ターゲットデータベースの制御ファイルがカタログ化に使用されます。外部カタログデータベースを追加する場合は、SnapCenterグラフィカルユーザインターフェイス (GUI) のデータベース設定ウィザードを使用して、外部カタログのクレデンシャルと透過ネットワーク印刷材 (TNS) 名を指定して構成できます。CLIから外部カタログデータベースを設定するには、`-OracleRmanCatalogCredentialName` オプションと `-OracleRmanCatalogTnsName` オプションを指定して `Configure-SmOracleDatabase` コマンドを実行します。

## RMANコマンド

SnapCenter GUIでOracleバックアップポリシーを作成するときにカタログ化オプションを有効にした場合は、バックアップ処理の一環としてOracle RMANを使用してバックアップがカタログ化されます。コマンドを実行して、バックアップのカタログ化を遅らせて実行することもできます `Catalog-SmBackupWithOracleRMAN`。

バックアップをカタログ化したら、コマンドを実行して、カタログ化されたバックアップの情報 (カタログ化されたデータファイルのタグ、制御ファイルのカタログパス、カタログ化されたアーカイブログの場所など) を取得できます `Get-SmBackupDetails`。

## 命名形式

SnapCenter 3.0以降では、ASMディスクグループ名が16文字以上の場合、バックアップに使用される命名形式は `SC_HASHCODEofDISKGROUP_DBSID_BACKUPID` です。ただし、ディスクグループ名が16文字未満の場合、バックアップに使用される命名形式は `DISKGROUPNAME_DBSID_BACKUPID` です。これは、SnapCenter 2.0で使用されている形式と同じです。

`HASHCODEofDISKGROUP` は、ASMディスクグループごとに一意の、自動的に生成される番号 (2~10桁) です。

## クロスチェック処理

クロスチェックを実行すると、リポジトリレコードが物理ステータスと一致しないバックアップに関するRMANリポジトリ情報を更新できます。たとえば、ユーザがオペレーティングシステムコマンドを使用してディスクからアーカイブログを削除しても、実際にはディスクにログがない場合でも、制御ファイルにはディスクにログがあることが示されます。

クロスチェック処理では、制御ファイルの情報を更新できます。クロスチェックをイネーブルにするには、Set-SmConfigSettingsコマンドを実行し、ENABLE\_CROSSCHECKパラメータにtrueを割り当てます。デフォルト値はFALSEです。

```
sccli Set-SmConfigSettings-ConfigSettingsTypePlugin-PluginCodeSCO-ConfigSettings  
"KEY=ENABLE_CROSSCHECK, VALUE=TRUE"
```

## カタログ情報を削除します

カタログ情報を削除するには、Uncatalog-SmBackupWithOracleRMANコマンドを実行します。SnapCenter GUI ではカタログ情報を削除できません。ただし、バックアップを削除するとき、またはカタログ化されたバックアップに関連付けられている保持期間とリソースグループを削除するときに、カタログ化されたバックアップの情報が削除されます。



SnapCenter ホストを強制的に削除する場合は、そのホストに関連するカタログ化されたバックアップの情報が削除されません。ホストを強制的に削除する場合は、事前にそのホストに関連するすべてのカタログ化されたバックアップの情報を削除しておく必要があります。

処理時間がORACLE\_PLUGIN\_RMAN\_CATALOG\_TIMEOUTパラメータに指定されたタイムアウト値を超えたためにカタログ化とカタログ解除が失敗した場合は、次のコマンドを実行してパラメータの値を変更する必要があります。

```
/opt/Netapp/snapcenter/spl/bin/sccli Set-SmConfigSettings-ConfigSettingsType  
Plugin -PluginCode SCO-ConfigSettings  
"KEY=ORACLE_PLUGIN_RMAN_CATALOG_TIMEOUT,VALUE=user_defined_value"
```

パラメータの値を変更したら、次のコマンドを実行してSnapCenter Plug-in Loader (SPL) サービスを再起動します。

```
/opt/NetApp/snapcenter/spl/bin/spl restart
```

コマンドで使用できるパラメータとその説明は、Get-Help command\_nameを実行して確認できます。または、"[SnapCenter ソフトウェアコマンドリファレンスガイド](#)"。

## バックアップ固有のプリスクリプトとポストスクリプト用に事前定義された環境変数

SnapCenterでは、バックアップポリシーの作成時にプリスクリプトとポストスクリプトを実行する際に、事前定義された環境変数を使用できます。この機能は、VMDKを除くすべてのOracle構成でサポートされます。

SnapCenterは、シェルスクリプトが実行される環境で直接アクセスできるパラメータの値を事前に定義します。スクリプトの実行時に、これらのパラメータの値を手動で指定する必要はありません。

## バックアップポリシーの作成でサポートされる事前定義された環境変数

- `* sc_job_ID *` は、処理のジョブ ID を指定します。

例：256

- `* SC_ORACLE_SID *` はデータベースのシステム識別子を指定します

処理に複数のデータベースが含まれる場合、パラメータにはパイプで区切られたデータベース名が含まれます。

このパラメータはアプリケーションボリュームに対して設定されます。

例：NFSB32|NFSB31

- `* sc_host *` は、データベースのホスト名を指定します。

RACの場合、host nameはバックアップが実行されるホストの名前です。

このパラメータはアプリケーションボリュームに対して設定されます。

例：scsmohost2.gdl.englobe.netapp.com

- `SC_OS_USER` は、データベースのオペレーティング・システムの所有者を指定します。

データは `<db1><osuser1><osgroup>|<db2>@<osuser2>` の形式で表示されます。

例：NFSB31@Oracle|NFSB32@Oracle

- `* SC_OS_GROUP *` はデータベースのオペレーティング・システム・グループを指定します

データは `<db1><osgroup1><osgroup>|<db2>@<osgroup2>` の形式で表示されます。

例：NFSB31@INSTALL|NFSB32@oinstall

- `* SC_BACKUP_TYPE *` にはバックアップ・タイプ（オンライン・フル、オンライン・データ、オンライン・ログ、オフライン・シャットダウン、オフライン・マウント）を指定します。

例：

- フルバックアップの場合：ONLINEFULL
- データのみのバックアップ：ONLINEDATA
- ログのみのバックアップ：ONLINELOG

- `* SC_backup_name *` はバックアップ名です

このパラメータはアプリケーションボリュームに対して設定されます。

例：DATA@RG2\_scspr2417819002\_07-20-2021\_12.16.48.9267\_0|LOG@RG2\_scspr2417819002\_07-20-2021\_12.16.48.9267\_1|AV@RG2\_scspr2417819002\_07-20-2021\_12.16.48.9267

- `* SC_BACKUP ID *` にはバックアップ ID を指定します

このパラメータはアプリケーションボリュームに対して設定されます。

例： DATA @203 | LOG@205 | AV@207

- **SC\_ORACLE\_HOME** は Oracle ホーム・ディレクトリのパスを指定します

例： NFSB32@ /ora01/app/oracle/product/18.1.0/db\_1 | NFSB31@ /ora01/app/oracle/product/18.1.0/db\_1

- \* SC\_BACKUP\_retention-\* はポリシーに定義されている保持期間です

例：

- フルバックアップの場合：毎時 | データ @ 日数： 3 | log@ count : 4
- オンデマンドデータのためのバックアップの場合： OnDemand | data@ count : 2
- オンデマンドログのためのバックアップの場合： OnDemand | log@count : 2

- \* sc\_resource\_group\_name \* で、リソースグループの名前を指定します。

例：RG1

- \* SC\_BACKUP\_policy\_name \* はバックアップ・ポリシーの名前です

例：backup\_policy

- \* sc\_av\_name \* は、アプリケーション・ボリュームの名前を指定します。

例：AV1|AV2

- \* SC\_primary\_data\_volume\_full\_path \* は、データファイルディレクトリに対する SVM からボリュームへのストレージマッピングを指定します。LUNおよびqtreeの親ボリュームの名前になります。

データの形式は、 <db1 >@<SVM1 : volume1 >|<db2 >@<SVM2 : volume2> となります。

例：

- 同じリソースグループ内の 2 つのデータベース： NFSB32@buck :  
/vol/scspr2417819002\_NFS\_CDB\_NFSB32\_DATA | NFSB31@buck :  
/vol/scspr2417819002\_NFS\_CDB\_NFSB31\_DATA
- データファイルが複数のボリュームに分散している単一データベースの場合： buck  
: /vol/scspr2417819002\_NFS\_CDB\_NFSB31\_data、herculus : /vol/scspr2417819002\_nfs

- \* SC\_primary\_archivelogs\_volume\_full\_path \* は、ログファイルディレクトリに対する SVM のボリュームへのストレージマッピングを指定します。LUNおよびqtreeの親ボリュームの名前になります。

例：

- 単一のデータベースインスタンスの場合： buck : /vol/scspr2417819002\_NFS\_CDB\_NFSB31\_redo
- 複数のデータベースインスタンスの場合： NFSB31@ バック :  
/vol/scspr2417819002\_NFS\_CDB\_NFSB31\_redo | NFSB32@ バック :  
/vol/scspr2417819002\_NFS\_CDB\_NFSB32\_redo

- \* SC\_primary\_full\_snapshot\_name\_for\_tag \* は、ストレージ・システム名とボリューム名を含む

Snapshot のリストを指定します。

例：

- 単一のデータベースインスタンスの場合：buck  
：/vol/scspr2417819002\_NFS\_CDB\_NFSB32\_data/RG2\_scspr2417819002\_07-21-2021\_02.28.26.3973\_0、buck：/vol/scspr2417819002\_NFS\_CDB\_NFSB32\_REDO
- 複数のデータベースインスタンスの場合：NFSB32@buck：  
/vol/scspr2417819002\_NFS\_CDB32\_data/Rg2\_scspr2417819002\_07-021\_2021\_21\_219002\_0226.3973\_0、バック：  
/vol/scspr2417819002\_NFS21\_2.17002\_NFS017002\_NFS019002\_002\_NFS019002\_42002\_4\_017202\_NFS122\_1821\_CD21\_2.17202\_NFS017202\_41\_CD21\_2.17202\_17202\_17202\_17202\_17202\_17202\_17202\_122\_17202\_17202\_122\_17202\_17202\_0.2\_R17202\_17202\_17202\_17202\_17202\_17202\_0.2\_NFS\_9\_17202\_17202\_122\_17202\_122\_DATA、NFS\_017202\_17202\_17202\_17202\_17202\_0.2\_NFS\_9\_R17202\_122\_17202\_
- \* SC\_primary\_snapshot\_names \* には、バックアップ中に作成されたプライマリ Snapshot の名前を指定します。

例：

- 単一データベースインスタンスの場合：RG2\_scspr2417819002\_07-021-021-02.28.26.3973\_0、RG2\_scspr2417819002\_07-021-202\_02.28.26.3973\_1
- 複数のデータベースインスタンスの場合：NFSB32@RG2\_scspr2417819002\_07-21-2021\_02.28.26.3973\_0、Rg2\_scspr2417819002\_07-01-202\_02.28.26.3973\_1|NFSB31@RG2\_scspr2417819002\_07-21-2021\_02.28.26.3973\_0、Rg2\_scspr2417819002\_07-021-02.28.26.3973\_1
- 2つのボリュームを含む整合グループSnapshotの場合：CG3\_R80404CBEF5V1\_04-05-2021\_03.08.03.4945\_0\_bfc279cc-28ad-465c-9d60-5487ac17b25d\_2021\_4\_5\_3\_8\_58\_350
- \* SC\_primary\_mount\_points \* は、バックアップに含まれるマウントポイントの詳細を指定します。

詳細には、バックアップ対象のファイルの直接の親ではなく、ボリュームがマウントされているディレクトリが含まれます。ASM構成の場合は、ディスクグループの名前です。

データの形式は、<db1><mountpoint1, mountpoint2>|<DB2><mountpoint1, mountpoint2> のようになります。

例：

- シングルデータベースインスタンスの場合：/mnt/nfsdb3\_data、/mnt/nfsdb3\_log、/mnt/nfsdb3\_data1
- 複数のデータベースインスタンスの場合：NFSB31@/mnt/nfsdb31\_data、/mnt/nfsdb31\_log、/mnt/nfsdb31\_log、/mnt/nfsdb32\_data、/mnt/nfsdb32\_log、/mnt/nfsdb32\_data1
- ASM の場合：+DATA2DG、+LOG2DG
- \* SC\_primary\_snapshots および \_mount\_points \* には、各マウントポイントのバックアップ中に作成された Snapshot の名前を指定します。

例：

- シングルデータベースインスタンスの場合：Rg2\_scspr2417819002\_07-02-2202\_02.28.26.3973\_0：

/mnt/nfsb32\_data、 Rg2\_scspr2417819002\_07-021 - 202\_02.28.26.3973\_1 : /mnt/bnfs31\_log

- 複数のデータベースインスタンスの場合： NFSB32@RG2\_scspr2417819002\_07-21-2021\_02.28.26.3973\_0 : /mnt/nfsb32\_data、 Rg2\_scspr2417819002\_07-021 - 202\_02.28.26.3973\_1 : /mnt/nfsb31\_log | NFSB31@RG2\_scspr2417819002\_07-21-2021\_02.28.26.3973\_0 : /mnt/nfsb31\_data、 Rg2\_scspr24178219002\_07819002\_302\_log - nfs3/026.32\_nfmnt\_302\_log

• **SC\_archivelogs\_locations** はアーカイブ・ログ・ディレクトリの場所を指定します

ディレクトリ名はアーカイブログファイルの直接の親になります。アーカイブログが複数の場所に配置されている場合は、すべての場所がキャプチャされます。これにはFRAのシナリオも含まれます。ソフトリンクがディレクトリに使用されている場合は、同じものが入力されます。

例：

- NFS 上の単一データベースの場合： /mnt/nfsdb2\_log
- NFS 上の複数のデータベースおよび NFSB31 データベースアーカイブログが 2 つの異なる場所に格納されている場合： NFSB31@/mnt/nfsdb31\_log1、 /mnt/nfsdb31\_log2 | NFSB32@/mnt/nfsdb32\_log
- ASM の場合： +LOG2DG/ASMDB2/ARCHIVE/2021\_07\_15

• \* **SC\_redo\_logs\_locations** \* は 'redo ログ・ディレクトリの場所を指定します

ディレクトリ名はREDOログファイルの直接の親になります。ソフトリンクがディレクトリに使用されている場合は、同じものが入力されます。

例：

- NFS 上の単一データベースの場合： /mnt/nfsdb2\_data/newdb1
- NFS 上の複数のデータベース：  
NFSB31@/mnt/nfsdb31\_data/newdb31|NFSB32@/mnt/nfsdb32\_data/newdb32
- ASM の場合： +LOG2DG/ASMDB2/ONLINELOG

• \* **sc\_control\_files\_location** \* には、制御ファイルディレクトリの場所を指定します。

ディレクトリ名は制御ファイルの直接の親になります。ソフトリンクがディレクトリに使用されている場合は、同じものが入力されます。

例：

- NFS 上の単一データベースの場合： /mnt/nfsdb2\_data/FRA/newdb1、 /mnt/nfsdb2\_data/newdb1
- NFS 上の複数のデータベース： NFSB3@/mnt/nfsdb31\_data/FRA/newdb31、  
/mnt/nfsdb31\_data/newdb31/NFSB32@/mnt/nfsdb32\_data/FRA/newdb32、  
/mnt/nfsdb32\_data/newdb32
- ASM の場合： +LOG2DG/ASMDB2/CONTROLFILE

• \* **SC\_data\_files\_locations** \* にはデータ・ファイル・ディレクトリの場所を指定します

ディレクトリ名は、データファイルの直接の親になります。ソフトリンクがディレクトリに使用されている場合は、同じものが入力されます。

例：





ーにアクセスするには、\* Settings \* > \* Policies \* をクリックします。

- バックアップスケジュール

バックアップスケジュール（バックアップが実行されるタイミング）は、リソースグループ設定の一部です。たとえば、リソースグループのポリシーで週単位のバックアップが設定されている場合は、毎週木曜日の午後10時にバックアップが実行されるようにスケジュールを設定できます。リソースグループのスケジュールにアクセスするには、\* リソース \* > \* リソースグループ \* をクリックします。

## バックアップの命名規則

Snapshotのデフォルトの命名規則を使用することも、カスタマイズした命名規則を使用することもできます。デフォルトのバックアップ命名規則では、Snapshot名にタイムスタンプが追加されるため、コピーがいつ作成されたかを確認できます。

Snapshotでは、次のデフォルトの命名規則が使用されます。

```
resourcegroupname_hostname_timestamp
```

バックアップリソースグループには、次の例のように論理的な名前を付ける必要があります。

```
dts1_mach1x88_03-12-2015_23.17.26
```

この例では、各構文要素に次の意味があります。

- `_dts1_` は リソースグループ名です。
- `mach1x88` はホスト名です。
- `03-12-2015_23.17.26` は日付とタイムスタンプです。

または、\*[Use custom name format for Snapshot copy]\*を選択して、リソースまたはリソースグループを保護しながらSnapshot名の形式を指定することもできます。たとえば、`customText_resourcegroup_policy_hostname`や`resourcegroup_hostname`などです。デフォルトでは、タイムスタンプのサフィックスがSnapshot名に追加されます。

## 著作権に関する情報

Copyright © 2026 NetApp, Inc. All Rights Reserved. Printed in the U.S.このドキュメントは著作権によって保護されています。著作権所有者の書面による事前承諾がある場合を除き、画像媒体、電子媒体、および写真複写、記録媒体、テープ媒体、電子検索システムへの組み込みを含む機械媒体など、いかなる形式および方法による複製も禁止します。

ネットアップの著作物から派生したソフトウェアは、次に示す使用許諾条項および免責条項の対象となります。

このソフトウェアは、ネットアップによって「現状のまま」提供されています。ネットアップは明示的な保証、または商品性および特定目的に対する適合性の暗示的保証を含み、かつこれに限定されないいかなる暗示的な保証も行いません。ネットアップは、代替品または代替サービスの調達、使用不能、データ損失、利益損失、業務中断を含み、かつこれに限定されない、このソフトウェアの使用により生じたすべての直接的損害、間接的損害、偶発的損害、特別損害、懲罰的損害、必然的損害の発生に対して、損失の発生の可能性が通知されていたとしても、その発生理由、根拠とする責任論、契約の有無、厳格責任、不法行為（過失またはそうでない場合を含む）にかかわらず、一切の責任を負いません。

ネットアップは、ここに記載されているすべての製品に対する変更を随時、予告なく行う権利を保有します。ネットアップによる明示的な書面による合意がある場合を除き、ここに記載されている製品の使用により生じる責任および義務に対して、ネットアップは責任を負いません。この製品の使用または購入は、ネットアップの特許権、商標権、または他の知的所有権に基づくライセンスの供与とはみなされません。

このマニュアルに記載されている製品は、1つ以上の米国特許、その他の国の特許、および出願中の特許によって保護されている場合があります。

権利の制限について：政府による使用、複製、開示は、DFARS 252.227-7013（2014年2月）およびFAR 5252.227-19（2007年12月）のRights in Technical Data -Noncommercial Items（技術データ - 非商用品目に関する諸権利）条項の(b)(3)項、に規定された制限が適用されます。

本書に含まれるデータは商用製品および/または商用サービス（FAR 2.101の定義に基づく）に関係し、データの所有権はNetApp, Inc.にあります。本契約に基づき提供されるすべてのネットアップの技術データおよびコンピュータソフトウェアは、商用目的であり、私費のみで開発されたものです。米国政府は本データに対し、非独占的かつ移転およびサブライセンス不可で、全世界を対象とする取り消し不能の制限付き使用权を有し、本データの提供の根拠となった米国政府契約に関連し、当該契約の裏付けとする場合にのみ本データを使用できます。前述の場合を除き、NetApp, Inc.の書面による許可を事前に得ることなく、本データを使用、開示、転載、改変するほか、上演または展示することはできません。国防総省にかかる米国政府のデータ使用权については、DFARS 252.227-7015(b)項（2014年2月）で定められた権利のみが認められます。

## 商標に関する情報

NetApp、NetAppのロゴ、<http://www.netapp.com/TM>に記載されているマークは、NetApp, Inc.の商標です。その他の会社名と製品名は、それを所有する各社の商標である場合があります。